



2897
1
13



2897
卷 1

七月九日

崖 歸 離 宮

仙果藏

而 鳴 神 寺 崎 回 權 與 於 隸 憂 亦 亦

出 中 半 而 女 茂 柏 芝 亦 龍 步 伎 是

已 祿 國 子 弟 豕 肝 絲 故 吏 旦 園 明

旗 以 斷 雷 雪 詳 羽 顛 末 儻 賢 亦 也

學 讀 止 官 攝 王 回 戲 場 亦 其 蒙 昧

息 太 食 飢 月 能 煩 惱 既 中 司 樞 罪

言 辭 尹 脚 邑 且 聽 王 回 以 釋

文 忍 个 明 秀 句 著 作 堂 南 以 驪

外 戚 傳 卷 一

卷 一

第一套

神崎乃假乃宿

其角



鯨の鱗

明の目
神の鱗

第二套

とむうの牛を親

あぶる宿の濡衣

あぶる路の雪の山

第四套

松が枝のまじり

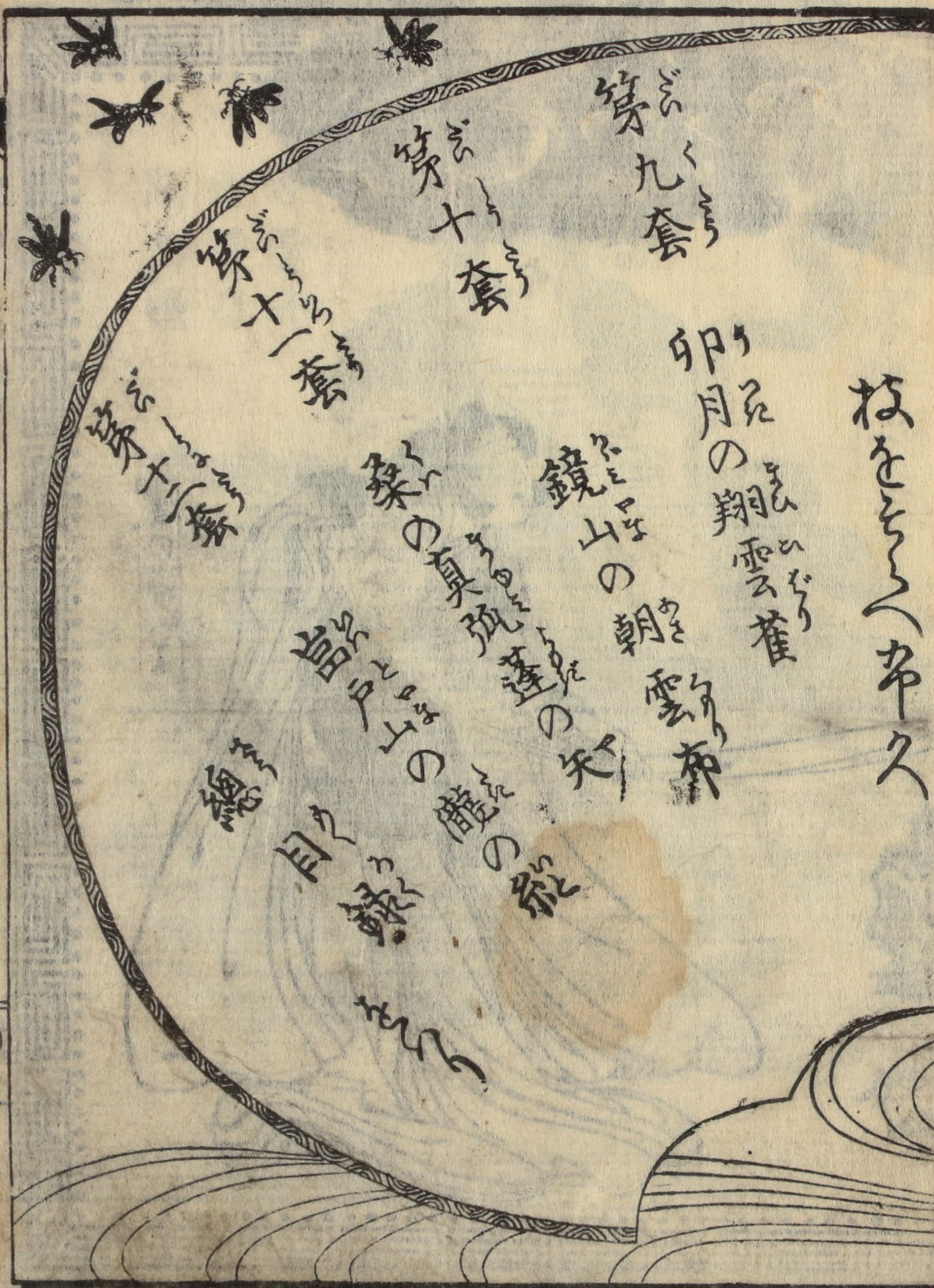
深山路のむらさき

藤乃子の稚鷹

第五套

藤乃子の稚鷹

藤乃子の稚鷹



枝をさくく糸久

名月や柳の

嵐雲



逢事者雲井
遙丹鳴神乃
音丹聞筒戀
且鮑



昭神上人

雲のしるし



もふとて
其遅し。常

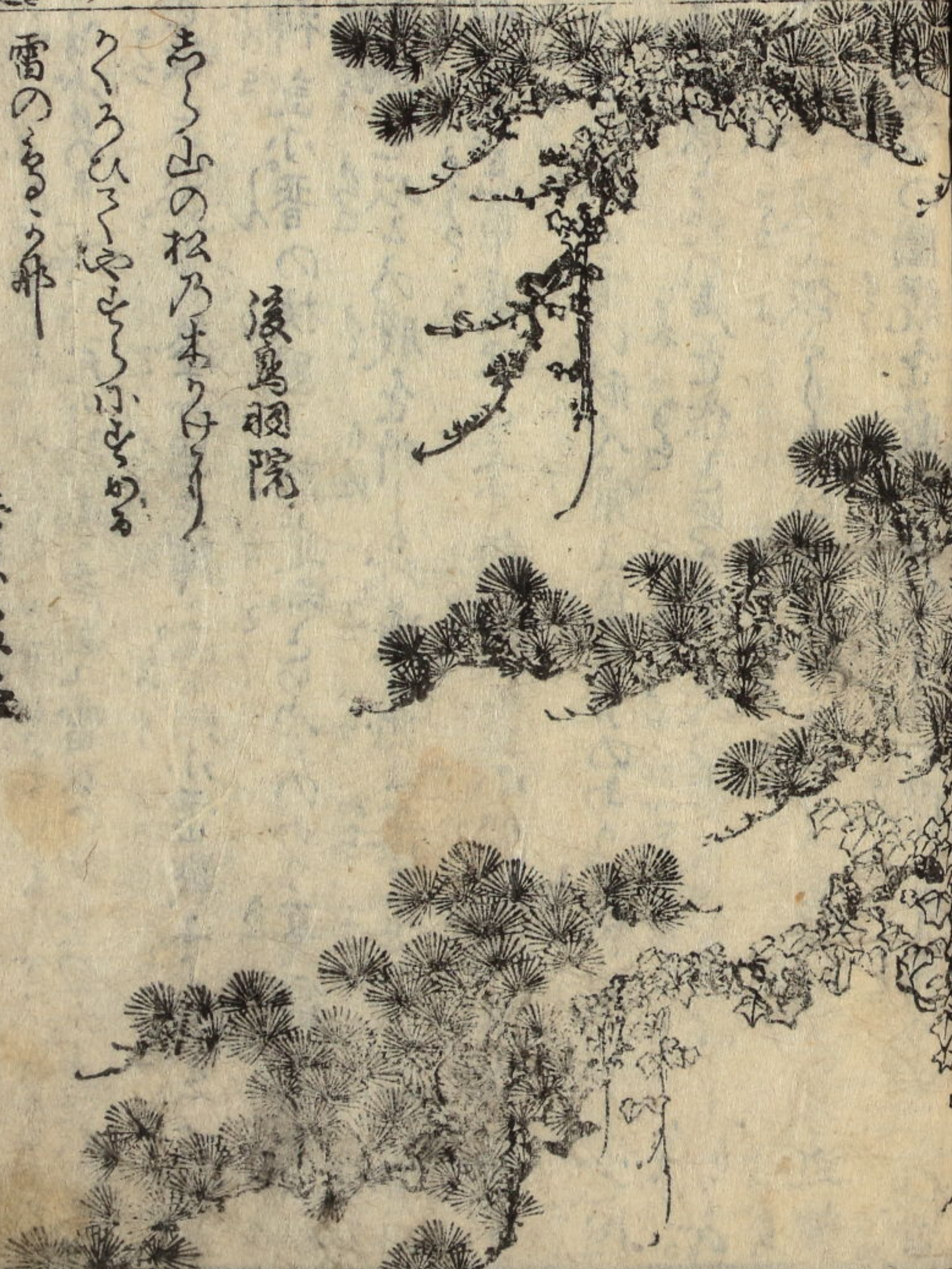
戦弱うて人よ
 狎り雨あふんと
 するといへ盤て當
 ぶとつり
 又一種ハ近曾浪
 遠人の版也閑田次
 筆といふもの小ええ
 和元年五月十日此
 獸勢列九日市あり
 塩竈へ落ちて死す
 大天立すありとむ

この外もさう
 あるけれど、その近
 を却て證とん。
 雷鳥ハ加賀國
 石川郡白山権現の
 杜の中あり。山
 雷との虫あり。形
 蛙のふ。竹の鳥好
 と彼虫と食ふ。心
 小ず。雷鳥と
 ぶ。五穀類。一
 謝約ハ虫の名ある



雷鳥圖

を杜鶴とも又謝
 約とふ。このつり
 け。雷鳥ハ大サ
 の。形も又鳩小
 類。首ハ雞の雌小
 似て。許難冠あり
 毛ハ黒白相雜。こ
 基石鶏といふ。形
 如く。足の毛あり
 此。彼。の。今。さ。う。な
 飛。渾。國。衆。鞍。嶽。小
 も。の。鳥。影。あり。と。



後鳥羽院

藤原家隆

あ。う。山。の。松。乃。木。り。け。り
 くらひ。て。や。さ。し。い。ま。め。る
 雷。の。も。の。う。那
 あ。い。せ。り。越。い。さ。う。事。よ。と。い。ち。も。も
 ち。の。を。さ。の。み。さ。く。夜。を。あ。う。と。の。お

雷の鳴とる。雲のうへを遊行。雷雲とては落る。獸を。漢の雷公。一
和名鉄神。其類。雷公一名の雷師。和名伊加豆知。一云奈流加美とんえく。
今の俗。火又ともふ。の。王元が論衡の画。雷公の状を圖と。連鼓の形。
似。人。人を推といひ。又。李肇が国史補。雷州小雷獸。人。人。とて。食と
いひ。又。千宝が搜神記。晋の扶風。楊道和。といふ。の。夏。霹靂。來。の。樹
の下。震ふ。道。和。錫。を。以。て。の。股。を。折。り。遂。に。地。に。落。て。去。と。い。ふ。骨。丹
の。く。眼鏡。に。似。たり。も。角。長。に。と。三。寸。餘。形。六。畜。小。似。く。頭。獺。猴。に。似。り
と。い。ふ。謝。在。杭。が。五。雜。俎。雷。の。形。人。常。に。見。る。月。の。あり。大約。雌。雞。小。似。て。肉
翅。あり。その。響。音。奮。振。と。た。の。声。を。作。と。い。り。夫。古。人。の。雷。公。を。説。や。べ。も。同。く。
或。人。に。似。たり。と。い。ひ。或。人。に。似。たり。と。い。ひ。或。人。に。似。たり。と。い。ひ。性。い。は。近。曾
本。邦。の。諸。雜。書。小。雷。公。の。圖。説。を。載。せ。と。れ。も。亦。其。の。形。の。多。異。ある。こと。に。雷

の。雷。獸。を。捕。り。捕。り。を。食。ふ。と。い。ふ。と。李。肇。が。説。も。又。証。に。雷
雷。記。に。云。雷。の。陽。氣。比。氣。を。誘。ひ。て。升。り。比。中。の。硫。黃。燐。消。り。と。も。う。升
り。天。に。到。り。大。陽。の。天。火。に。れ。小。衆。に。て。空。中。に。交。り。入。り。忽。發。聲。響。騰。是
即。道。化。の。火。鏡。也。又。別。に。この。火。氣。を。吸。む。獸。あり。と。雲。中。を。行。き。還。入。雲。に
雷。雷。と。獸。と。の。一。物。と。い。ふ。と。世。の。経。籍。に。載。する。所。火。を。食。ふ。雞。火。に。ま。火。を
雷。雲。中。に。み。れ。と。い。ふ。鳥。と。い。ふ。の。類。あり。と。い。り。同。書。に。亦。云。或。人。に。白。の
雷。鳥。の。大明。一。統。志。に。載。する。ところ。の。松。雞。あり。と。い。り。古。本。に。松。雞。と。あり。と
校正。の。本。に。鶴。雞。と。あり。と。の。鳥。と。い。ふ。と。松。を。栖。と。い。ふ。松。雞。と。い。ふ。と
致。され。和。平。も。松。を。詠。め。と。い。ふ。と。松。と。い。ふ。と。世。に。雷。公。を。爲。す
と。い。ふ。野。雞。に。似。たり。予。を。北。國。の。人。は。例。に。鳩。に。類。と。い。ふ。と。こ。の。圖

すく西へ傾け。尾上を隔て、狹壯鹿の北へ、声もけりあり。この外は、好む
過つ。今の退るゝんとひらき、後をさうとんぐる小忽地草の葉のまじり
と動くを、何ぞとて熟視せば、叢ならねば、狹壯鹿のやその北を慕ひ来くる。
んとするもどありける。寔小前世の業因よりありけん。亦父が殺生の惡報小
やうらん。西宮にこの形容をとらんやうそく。年末の道を先失ふ。怒
火吐裏は燃。春心眼底は動れ。ほど息つたういふやう。天地開闢とあり
より。ゆえに活るもの男の女をかりひ女の男を慕ふ。これ陰陽自然の理
ありて教ぜられどもあづかう知る。あるはつが釈教よ。それうを替けて
事の時よ。時もあるはつ小びや。せん不幸なりと孤となりしより。むもあらぬ出
家して。この煩惱をうつとよこと世の常言よ。和尙うち中の餓鬼と云ふほど
ある。うなやみ。名山其には住持として衣食住の三つは富とし。おとのりのか
りて。孰う遺し。孰うせん。まじりて天竺より入りの沙門ありたり。野小
感ずるところありて。その精を世つどの精草の葉小わたり。時は北鹿未
彼草を食ぬ。らの鹿遂は有身を生るもの。形状人より。頂より一の角生
りと援く怪文あり。せいの一角仙人と有り。げれば道のいと高れ。又齡
の傾けたるも。只らの迷あるよこと。支那の比丘が寡婦小染着て。故め説く大
庄嚴論よりえ清水寺の僧が進命婦懸想で縁由載く。宇治拾
遺はあり。志賀寺の朝寛大原野の尼がとれた。る是情の中は迷を生じ。迷
極めて更は悟の門を開けり。遠莫あつね後の世をこのまんとき。今生を
化小るさんへ。と思ふ所。所為なり。この利根は惑され。多生の意樂を
忘却。三世の諸佛を誹謗する。魔業の火坑小陷くとをあらう。頭の微
念を果さんと。ひまわりを歩く。西宮へかくとひつ。処も去ら

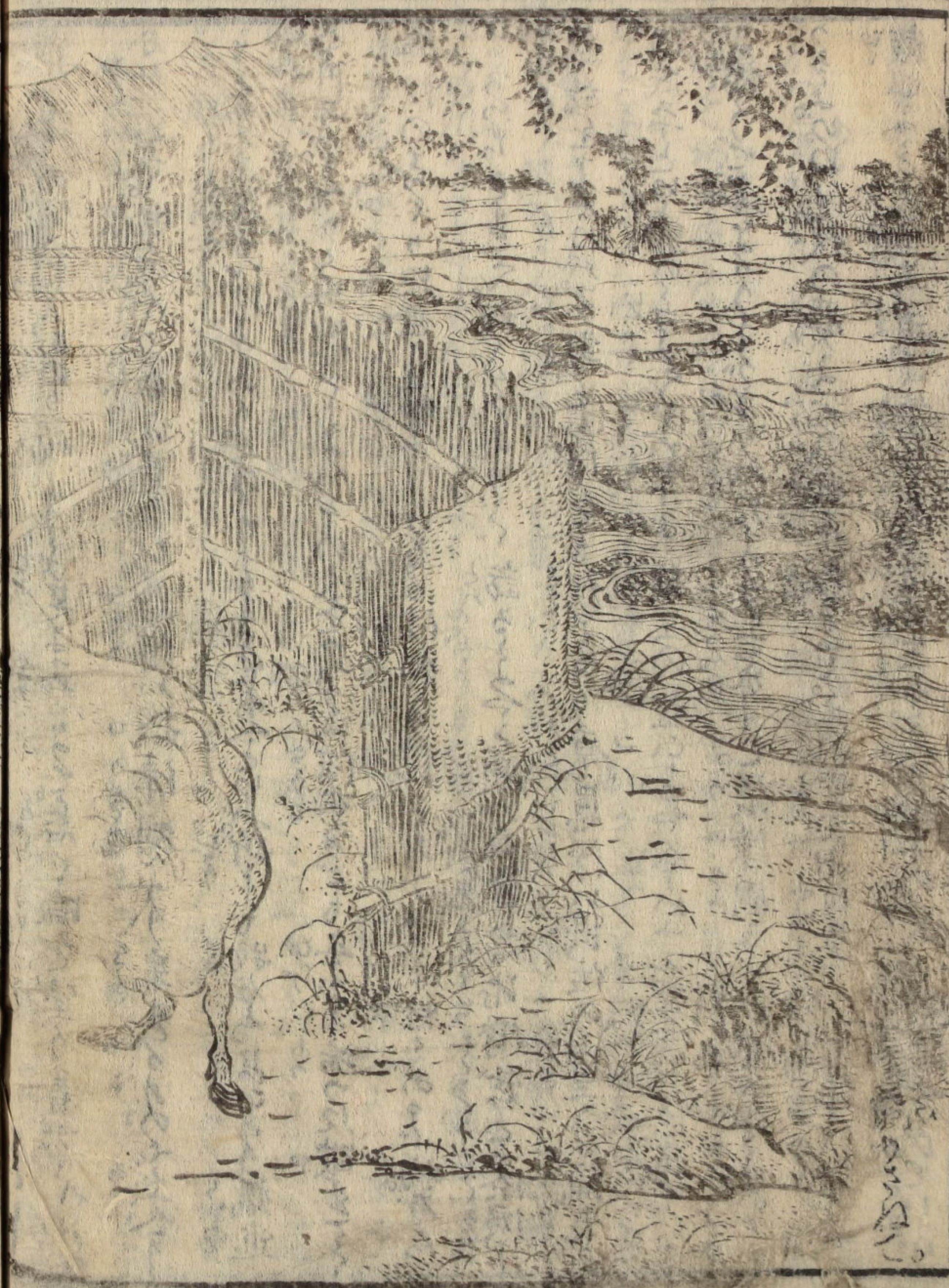
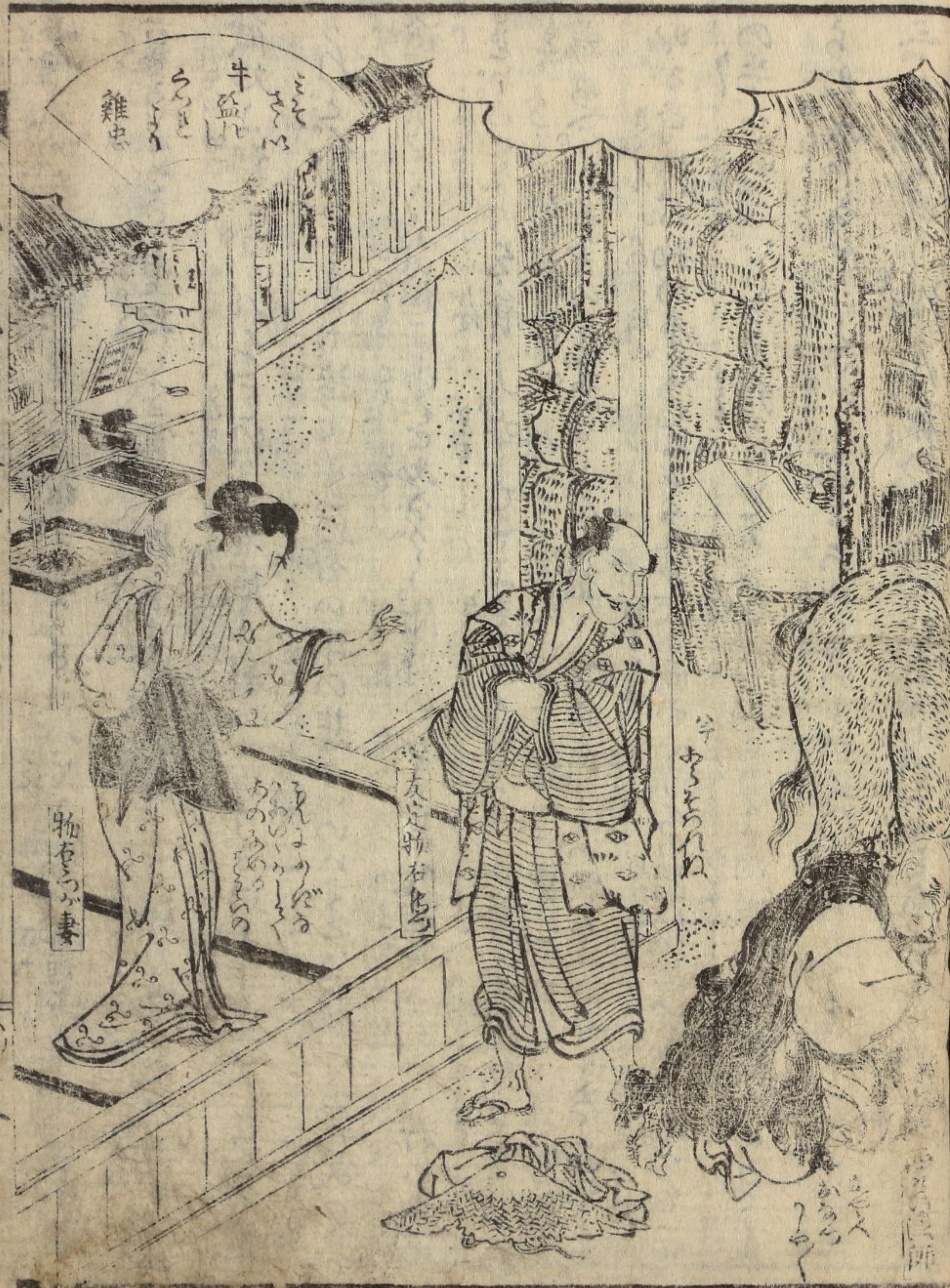
雲色明卷一



女

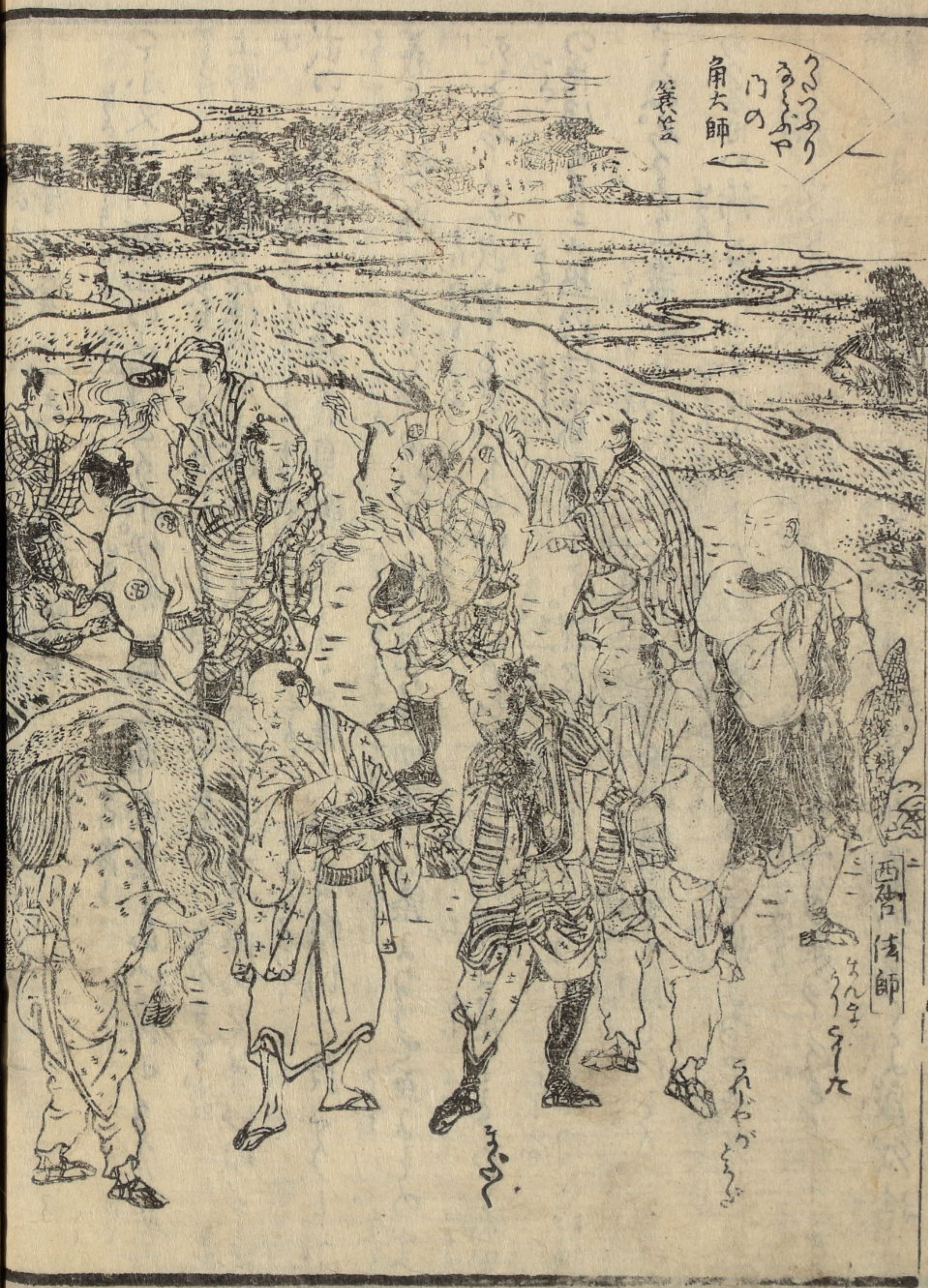
よとぞあゝも思ひ乱れし。信とらるるつね。こゝれをがら思ふ。誰とぞ
 んとぞ。財祿もたれ。ゆつと。つてあふた。一とび故郷小まうり。とともか
 りもちめと尋思。蓮葉がふる。練を賣る。路費と。近江を投る
 いとだる。真言院あり。那日西替が帰らざるをいづ。次の日人を出して
 その往方を索問する。悪夏千里張走るといふ。常言よりれど。件の法
 師。神崎の花街小酔卧。世のゆえを憚る。逐電と。と風聞す。
 同宿の法師を。もや。もらの風声を。めて。啼り笑ひ。彼青道を。おま
 小我慢の鼻を。うごけ。遂は魔業。墮る。や。ば。う。し。う。と
 私語あひ。住持も。聞。て。應。近江の長光寺。消息。と。
 縁由を告。彼地の道俗。け。け。親。も。疎。も。て。苦。
 め。と。あ。は。え。る。び。て。西。替。へ。持。津。國。を。旅。と。る。び。て。日。も。あ。ぬ。小。
 近江路。入。る。が。又。あ。や。う。ん。往。は。故。郷。を。出。と。れ。一。守。住。持。一。
 綿の袈裟を。掛。ふ。あ。う。ど。再。び。帰。ら。じ。と。廣。言。ち。る。も。あ。る。よ。今。の。故
 郷。も。所。容。と。と。ま。う。り。後。指。さ。も。ん。の。面。が。せ。う。り。され。ば。と。路。限。も
 既。は。盡。れ。ば。あ。は。遠。く。ま。う。ん。も。あ。や。う。と。と。ん。の。と。ん。と。進。退。も。小
 究。も。ね。れ。ど。さ。と。が。小。恥。武。佐。へ。ま。も。帰。ら。じ。と。大。津。草。津。の。在。家。う
 を。食。う。と。う。や。飢。を。凌。び。て。日。を。あ。つ。よ。あ。る。日。守。山。より。臨。江。負。て。ぬ。
 黄。牛。あり。野。洲。川。を。渡。さん。と。牛。飼。の。彼。処。の。岸。に。牽。き。上。る。目。今。體。度。と
 紐。を。う。ろ。し。牛。を。一。牛。飼。が。足。を。紙。で。己。ど。の。時。西。替。も。か。は。じ。け。小
 を。在。し。が。の。形。勢。を。い。づ。と。の。故。を。問。ふ。牛。飼。答。ふ。それ。別。は。仔細。あ。る。小
 あ。う。ど。の。牛。太。く。う。れ。は。押。さ。る。と。り。斯。の。と。う。に。畜。類。を。も。撫。め。れ。ば
 その。友。を。紙。る。め。の。牛。を。め。て。友。と。す。小。と。と。い。ふ。面。破。張。以。て。け。小

よとぞあゝも思ひ乱れし。信とらるるつね。こゝれをがら思ふ。誰とぞ
 んとぞ。財祿もたれ。ゆつと。つてあふた。一とび故郷小まうり。とともか
 りもちめと尋思。蓮葉がふる。練を賣る。路費と。近江を投る
 いとだる。真言院あり。那日西替が帰らざるをいづ。次の日人を出して
 その往方を索問する。悪夏千里張走るといふ。常言よりれど。件の法
 師。神崎の花街小酔卧。世のゆえを憚る。逐電と。と風聞す。
 同宿の法師を。もや。もらの風声を。めて。啼り笑ひ。彼青道を。おま
 小我慢の鼻を。うごけ。遂は魔業。墮る。や。ば。う。し。う。と
 私語あひ。住持も。聞。て。應。近江の長光寺。消息。と。
 縁由を告。彼地の道俗。け。け。親。も。疎。も。て。苦。
 め。と。あ。は。え。る。び。て。西。替。へ。持。津。國。を。旅。と。る。び。て。日。も。あ。ぬ。小。
 近江路。入。る。が。又。あ。や。う。ん。往。は。故。郷。を。出。と。れ。一。守。住。持。一。
 綿の袈裟を。掛。ふ。あ。う。ど。再。び。帰。ら。じ。と。廣。言。ち。る。も。あ。る。よ。今。の。故
 郷。も。所。容。と。と。ま。う。り。後。指。さ。も。ん。の。面。が。せ。う。り。され。ば。と。路。限。も
 既。は。盡。れ。ば。あ。は。遠。く。ま。う。ん。も。あ。や。う。と。と。ん。の。と。ん。と。進。退。も。小
 究。も。ね。れ。ど。さ。と。が。小。恥。武。佐。へ。ま。も。帰。ら。じ。と。大。津。草。津。の。在。家。う
 を。食。う。と。う。や。飢。を。凌。び。て。日。を。あ。つ。よ。あ。る。日。守。山。より。臨。江。負。て。ぬ。
 黄。牛。あり。野。洲。川。を。渡。さん。と。牛。飼。の。彼。処。の。岸。に。牽。き。上。る。目。今。體。度。と
 紐。を。う。ろ。し。牛。を。一。牛。飼。が。足。を。紙。で。己。ど。の。時。西。替。も。か。は。じ。け。小
 を。在。し。が。の。形。勢。を。い。づ。と。の。故。を。問。ふ。牛。飼。答。ふ。それ。別。は。仔細。あ。る。小
 あ。う。ど。の。牛。太。く。う。れ。は。押。さ。る。と。り。斯。の。と。う。に。畜。類。を。も。撫。め。れ。ば
 その。友。を。紙。る。め。の。牛。を。め。て。友。と。す。小。と。と。い。ふ。面。破。張。以。て。け。小





うさぎあり
あまふや
いの
角大師
義安



日傭ひくも死大津の商人ホカカノ牛を牽き妻と子と娘といふも外の牛
のと牽あるも死す。賃浅も人あまらへはつていづもろく牛一頭を
飼ふやと年来その用意して。月毎は五文十文の賃を払ひ行々移る。
や三両の金残りくる。わけてある日武章は大津の牛市あり。いと遅し
黄牛を買ひてくれば。うぐ。然びく。さかぬ。牽きて歸る。妻もも年未
のかつじを物くらへ。毒も子をもろろをよめ。本浅くともひねると飲
る。借地よりむけど相列底倉より。兄ち弟立武泰が書簡到来也。
別てより下さむも。経る音耗をゆざりよ。こへるうざる僥倖として。武
章忙しげに封皮押切て讀も果どぞ。二人の子どもを近く招き妻小
も彼書簡を示してわたりたる。この世は在るともこの世ごとくつる。兄武
泰とのべ。この十年あまり以来親姑峯のあらく。底倉といふ山里にや

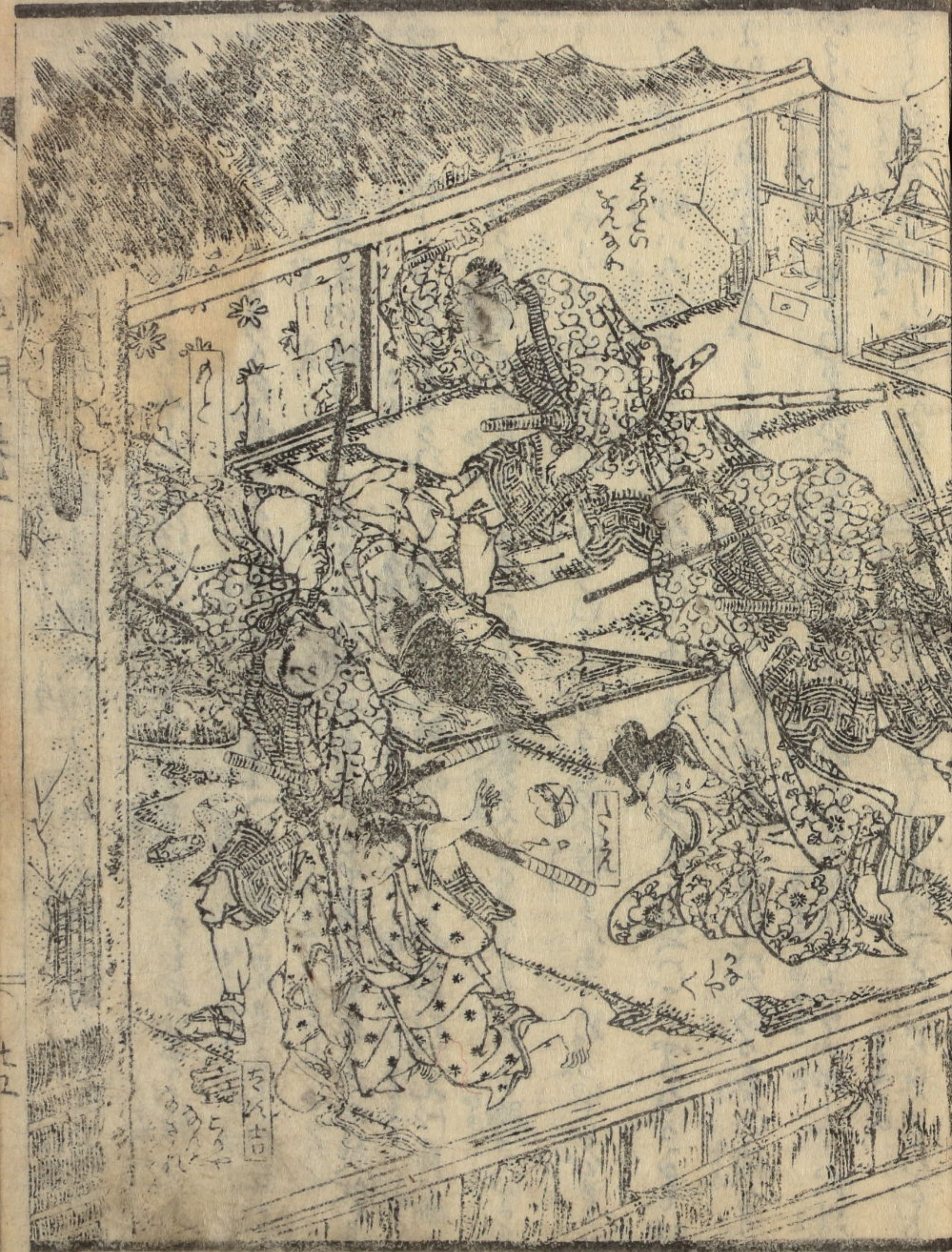
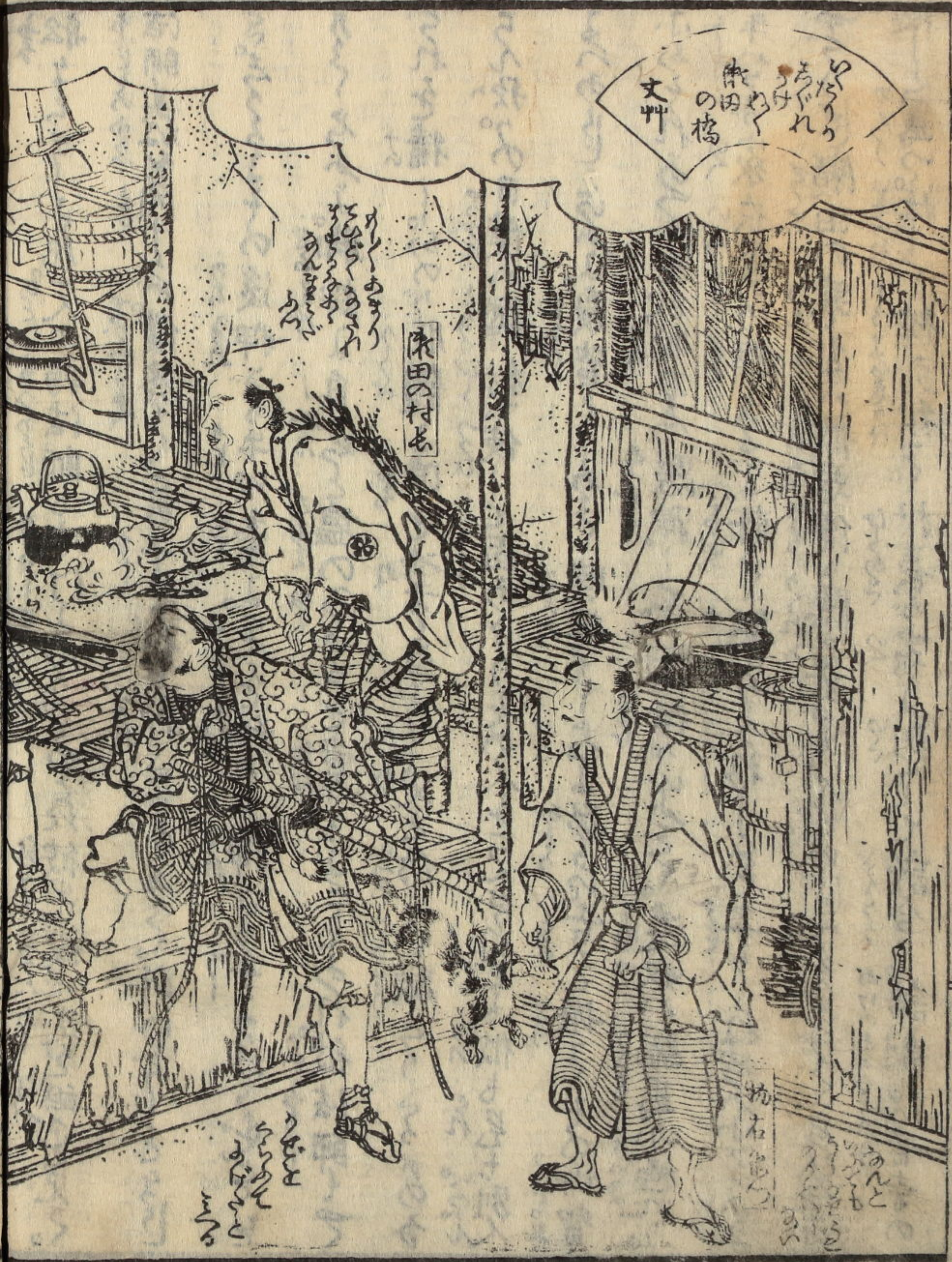
一、これより底倉の住人木賀十郎光輝ハ新田舊好の武士なり。自ら
 自らも彼人ニ扶持せられ富よりあり。頻に養ふよりと
 自らも。小光輝ハ鎌倉殿尊氏の嫡男。一時鎌倉殿の時。時鎌倉殿の嫡男。一時鎌倉殿の時。時鎌倉殿の時。
 在番。近曾帰國せられ。光輝彼地より
 其身ハ頼田ハ院住居するを。灰より。如きことあり
 宜しと宣す。ゆゑに便宜を。後ハ堪す。光輝
 遣ハれ。示と。来。光輝
 定め。再會の日近るべ。因。長。と書。光輝
 猶豫。彼地ハ旅。遠。必
 妙も。母の看病。牛。の食。必
 留守。願。彼と説。能。後。

牛の額を折るは牛も養ふ主やあらん。額をひきとすりつけり。かぎもあらずなり。とらひつゝ氣をもちていへ。何れに對ひて牛は久く養ひぬまや。又近曾にあつてもと問は。えは答てそれと道曲大津の牛市なり。夫が買きて来しといふ。こゝに至る物なり。よもしく疑念を生じ。その家の會員さうぞ。ける牛を買はん。容易ならずあり。どうある故あべーと深念して。この日ハゆるものほど程みく天も晴よりれば告別して走り出直小幡よりうつろ。その妻と奴隸ホを呼び集合するん。如此とのとありける。それゆゑとひむぐらせども。一切そろそと彼牛よりて。瀬田の寒家よりあらんと。六衆皆疑ひ迷ふ。是非の分別なるぶりのほ。中より未彼牛を牽とりたる下士。田舎すゝと生もよくとひかりもするあり。いづころ僕件の牛をと奪く。野刈川

船より一とれた一人の弱法師も亦けりあり。とれた彼牛。僕が足を踏むをえく。
 法師其なを問へ。僕答ふ。その牛を押しをる。斯のどとらじ。
 さ。さうさうその後押さる牛。牽よ。足を越ると押さる牛よりど。とを
 かくさふ。脚絆は自然と塩のひくるを嘗る。さうとあれ彼法師は
 られを猜し。あのが肢體は塩を塗る。父と偽りて騙さる。さうめを
 らん。秋の目僕に隣村へ使て面あさる。その人を見られども。彼も是も別人
 あり。あはれとふ。衆皆い。めく。曉得。さうさう。舌を振る。その奸智
 小。それあり。物を踏蹴して。けはは。い。ど。這奴へ騙馬。極れ。
 牛。家衣食の根。輒く騙さる。れ。を。女。ね。ぞ。小。さ。
 ず。に。瀬田の寒家。彼悪僧が隠家。さう。さ。の。は。す。え。あ。げ。く。思。ひ。を。
 べと罵つ。忙しく。絆引。彼。村長が家。到。て。談。合。詰。朝。観。音。寺。の

やうやう
あつた
うけ
衆の
橋
文州

赤田の村長



城の口より首尾よく討られし頼朝氏頼朝は下知して殿の捕人をば向う

武蔵の宮にありしともあらざるにえは二人の子にても夫のふりともひす。旅する

あひて十日はあつた。今ころの底倉とやうな一ひつたて見れば対面

あひてふふ年来の物なり。とやあらんやあらんとて長に留守居の徒然を

慰めある折しもあはれ鳥なりと啼つた。軒端より花が散れえは耳を側

る。あはれつらう鳥啼の思ひに。あはれ夢もさうさう胸をさす

ち騒ぐや。り。あはれこのうさうさぬもの。あはれいふ様にあはれぬ。いふと

あはれいふ。妙なる次吉と目をえあら。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ。あはれいふさういふ

とんじなもやうに飛ぶ兵士りうともし屋のうへへ貰ひのけりをも所ありきつゝ
索れどもいづ間もあらず草屋の外は歸ふ處もあらずとてそのあつても惡僧も既
曉りて逃亡しう。這奴どもおろくくとして時をえにを引起て常々病
人のうへへさる。若しは迫り。打れりては昏死す。甦生るに氣をさすべし
人のうへへも亡骸の枕を後方より着る。ふれとらん母のうへへ。喃と母に
いひける。声も戻りてうねりて。ほりてはうりり。隣をあらね。壯士のこ
ゆをさう。物ともいふ。ふれひの外はうりて奴ら。の。空元あつてんも量に
村長り。屍に守れ。物なり。その牛を牽き。めあともよまきと下り。後
沈む。妙る次吉を軒々と縛る。引とて歸る。とて。

雲散間雨夜月卷之一 終



